

〈実践報告〉

明日も早く行きたい学校づくり構想について

酒井 義 佐久市立中込中学校

The Report of School Reform Plan to Pleasant School

SAKAI Tsutomu: Nakagome Junior High School, Saku City

In this paper, a school reform project “Ashita mo hayakuikitai gakkou tukuri” was introduced and discussed. In order to prevent various recent school problems, bullying such as school refusal, violence, and anti-social behaviors, the reform project was plan. At a junior high school, the project was implemented for 3 years. Cooperation with people at the area and improvement of self-esteem of students and teachers were two important goals of the project. The school system has been changed and the teacher and students in the school have become more positive in their attitude toward school. The people at the area were more engaged to the school.

【キーワード】 学校改革 心を育てる 学力向上

1. はじめに

筆者は長野県教育委員会事務局教学指導課生徒指導係に平成7年4月から11年3月までの4年間在籍し、その間不登校対策やいじめ対策を担当してきた。国や県はその間様々な施策を講じてきたが、不登校児童生徒数は増加の一途をたどってきたし、いじめの問題や暴力などの問題行動も後を絶たず、さらに高校中途退学の問題などもあり、その4年間で事態が好転する兆しはなかなか見られなかった。施策の面でも、スクールカウンセラーの増員など人的配置の強化を行ってきており、その結果相談件数が増加するなど、それなりに成果はあったと思われる。しかし、そういった施策はいわゆる対症療法的な施策であり、対策が急務であることから、そういった施策の必要性を感じつつも、なにかもっと抜本的な策はないものだろうか、考えていた。

2. 「明日も早く行きたい学校づくり」構想について

学校教育や教師のあり方における問題は、多くの専門家から保護者や一般の方々に及ぶまで広く取りざたされ、長く批判の対象になってきたことは否めない事実である。そういった批判等に対し、学校や教師は、子供に現れているさまざまな問題の解決には、学校や教師ばかりでなく「家庭」や「保護者」、「地域」などに至るまで、それぞれが自らのあり方につい

て問題点を探る努力をし、そのうえで改善のための具体的方策を出し合うべきではないか、という思いをもっていると思う。しかし、それを口にするのは「言い訳」がましくもあり、学校あるいは教師そのものにも自分の力で、という自負もあるので、車座になって語り合い、同じ視点で役割分担をしつつ子供に対することが、できそうでできない現実があったように感じる。こういったこわばった関係が今の生徒指導上の諸問題の背景に長い間座り続けているようにも思われる。

折しも教学指導課の4年目に、これからの学校のあり方をデザインすることになり生徒指導係の担当としてまとめたものが資料1である。「明日も早く行きたい学校づくり」構想で最も大切に考えたのは施策が学校から地域に至るまでカバーし、全体に明るさや希望があることである。生徒指導対策といえば人的配置の充実や研修による教員の資質の向上などがまず上げられるが、安らぎのある器としての校舎づくりや地域全体に呼びかけて課題を分かち合い、具体的な協力を得ていく積極的な連携なども是非必要であると考えた。構想の中から1,2具体的に述べたい。「学校経営や教師の力量向上プラン」では、第一に市町村教育委員会や各学校の校長の学校経営のビジョンの明確化が求められる。自校の課題は何で、今どういった状態にあるのか、そしてどういった方向を目指し、今何をしているのか、こういったことについて求められたら即答えられる設置主体者であったり管理職でありたい。そういった意欲や課題解決を保障するために、「個性ある経営のための施設設備充実や教職員確保のための助成事業」を構想した。拘束や条件のない自由な発想で一定の年間予算が活用できるような柔軟性を資金的に保障し、人材が必要な学校は人材を補充する。施設を拡充させたい学校は施設面の充実を図る、などである。個性的な学校経営はそういった予算的裏づけがあって実現されるのではないだろうか。

「やすらぎと感動のある学校実現プラン」では、これも学校予算との関係もあってこれまでなかなか実現できなかったことだが、学校にはいわゆる「癒しの空間」や「安らぎのスペース」がもっと欲しい。子供同士、教師と子供、地域の人と子供や教師が心安らいだ気持ちで語り合えるようなスペースを保障していくことで、人間関係は和やかになり、ひいては互いに柔らかなネットワークで結ばれあうはずである。学校の雰囲気や物理的空間的にも向上させたいのである。

学校の課題を明確に示し、解決のために一人ひとりの教師や地域住民が具体的に取り組むべき方向がはっきり見え、また自己評価や相互評価ができるような学校づくりをしていくことが、表層として生徒指導面に表れた様々な問題を解決していく近道ではないかと考える。

言い尽くされたことばであるが、本当に「家庭・地域・学校が夢を持ちながら一体となって」取り組めば多くの問題は解決に向かうはずである。「明日も早く行きたい学校づくり」構想はそんな思いから作成したものである。

3.N中学校に赴任して

教学指導課で構想した「明日も早く行きたい学校づくり」を具体化したいという願いを持ち、11年4月にS市のN中学校に赴任した。かつて荒れた時代もあったその学校は、一時期

よりはよくなっていたものの、依然として学校全体に落ち着きがなく、問題行動も多くて教師集団はかなり疲労している様子だった。

N中学校は10年程前に校舎が全焼したという歴史がある。その火災の原因について、当時どのような説明が保護者や地域全体になされたか不明だが、当時の教師や学校の対応について不信感が払拭できないまま現在に至っている人の多さに驚かされた。不信感と学校の荒れが相関関係で続いてきているような印象を覚えた。何かあると、地域の方の口からは当時のことが話題になる。しかし、不信感は裏返せば期待感でもある。歴史と伝統のあった地域の学校を、もう一度見えるような形でいい学校にしてほしい、そういった願いが時に厳しい言葉になって表れていると解釈し、耳を傾けてきた。

このような状況を踏まえて施策を講じていくための観点としては、①教師集団として自校の課題を洗い出して共通理解に立ち、一人ひとりの教師が課題解決に向けて何をすればいいのかを明確にすること。また、何をしているのかが子供や保護者等にも分かり、自己評価や相互評価ができること。②地域の人材を積極的に取り込み、学校の課題を共有し、地域全体で子供を育てるという認識に地域を変えていくこと。③ゆとりのある日課や会議の精選など、ハード面で整備をすすめる、学校業務をスリムにして教師集団が快適に仕事ができる環境設定をすること。などが上げられる。「明日も早く行きたい学校づくり」の構想を踏まえ、上記の観点で取り組んだ具体的な事例について次の項で述べたい。

4.二つの実践

(1)「心を育てる会」の実践（平成11年度～）

N中学校では平成11年5月に、「心を育てる会」を立ち上げた。これは、学校ごとに当時の文部省から呼びかけがあつて設置した「いじめ不登校等対策委員会」をモデルチェンジしたものである。こういった会議を設定すると、現実には「青少年健全育成会議」等とほぼ同じメンバーが出席し、話し合われる内容もいじめや不登校の概要に留まらざるを得ず、結果として内容も同じようになる。作ってはみたものの有名無実化していることの多い会議である。

そこで、発想を転換し、「対策」ではない「育てる」会議にしようということ案を示した。「明日も早く行きたい学校づくり」の構想から中学校で出来そうなもの、やや荒唐無稽だが発想転換に必要なものなどを示して、まずPTAの関係者の意識改革を図った。心を育てる会で示したプランを資料2に示す。最初の時点で関係者に行った説明では、次の7点を強調した。①この会は、直接いじめの問題や不登校の問題だけを扱う会ではないこと。②「共に子供を育てるスタッフ」という意識で行動する組織であること。③直接子供に機能するだけでなく、施設面にも機能すること。④ボランティアで組織すること。⑤学校の内外を問わず活動すること。⑥ホームページ上でも募集や広報活動すること。⑦将来的に学区全体にN中学校の子供を育てるヒューマンネットワークを構築する基礎母体になること。であった。

以上のような内容で趣旨等の説明をし、賛同を得てスタートした。当初はPTAの役員や古くから学校に入っていた4名のボランティアが中心の活動だったが、学区の全戸に募集案内を配付したり、ホームページで会員を募集したりした結果30名を超える様々な地域の方の登

録があった。13年度末で設立して3年である。現在登録会員数は35名である。13年度の活動内容と成果は下記のとおりである。

平成13年度の活動内容

- ・ 絵画ボランティア：校内に常設のギャラリー設定し、地域の方が絵を展示する。管理、掛け替え等一切ボランティアの責任で（5名）
- ・ 生徒相談ボランティア：空いている相談室等を活用し、主任児童委員や住職などが子供の話し相手、相談相手をする（6名）
- ・ 朝の読書の読み聞かせボランティア：通年で実施している「朝の読書」で一日ごとに教室を巡回しての読み聞かせをする（6名）
- ・ パソコン指導ボランティア：放課後のパソコン教室を開放し、自由にパソコンに触れさせる。そのための指導メールのやりとりによる相談も含め（2名）
- ・ その他：環境美化のための植樹、植木の剪定、書道・茶道・わら細工・絵手紙の指導（6名）

活動成果

ボランティアが学校に入ることによって、これまでと全く閉鎖的だった学校に新しい風が入り、特に生徒指導面ではさまざまな角度から層の厚い指導が出来るようになってきている。関わるボランティアの数が増加するに従って、学校に対する理解が深まり、批判的な言動から理解的で協力的な言動が多くなってきている。ボランティアをしている地域の方々自身にとってもいきいきとしており、やってよかった、もっと続けたい、という意見が多い。その結果ボランティアの人数も増加している。校内に絵が増えたり、樹木が美しく整えられるなど、環境面でも安らぎのある学校に変化しつつある。

(2)「学力向上プロジェクト」の実践（13年度～）

3年生の数学でチームティーチングを実施しているが、基礎的な理解が完全でない子供が非常に多い現実がある。さらにそういった悩みを抱えている子供が併せて生徒指導上の問題を抱えている比率も高い。このような子供は自己存在をアピールするように問題行動に走るのである。一方、すぐれた力を持ちながらその能力を十分に伸ばしきれない子供についても、ストレスが蓄積するという点においては同様である。こういった子供たちは教師の指導や授業に対して信頼感が薄く、しばしば反抗的になったり、取り組みがよい加減になったりするケースもある。一般的に、教師はこういった子供に対して現象面に表れた問題行動や落ち着いた生活に対して正に対症療法的な指導、言いかえれば後追いの指導に明け暮れる。それは結果的に子供との人間関係の崩壊を招き、事態は一層深刻になって教師もまた疲労困憊の状態になる。その状態は授業や校務分掌に影響し、学校全体がガタガタになっていく。こういう悪循環が本校も長い間続いてきたのではないだろうか。

さらに子供は他の学校の状況について知らない。お手本になるのは上級生の姿のみであるから、その姿が悪しき伝統の如く受け継がれ、学校の流れが変わりにくいのである。そこで、第1に生徒指導上の問題を解決するためには学力の向上が不可欠である、第2に学校の流れを変えるには向学の気風を醸成し、本流を太くすることである、という2つの仮説をたて「学力

向上プロジェクト」を立ち上げた。

① 学力向上の時間の取り組み

月曜日の放課後は部活動がないいわゆる「ノー部活デー」として位置付けていた。その時間を活用し「学力向上の時間」を位置づけた。これは、すべての教師が何らかの講座を開設し、希望者のみが受講する自主的な学習の時間である。毎週必ず出席しなければならないとか、講座を変更してはいけない、などの拘束はない。1学年は各種検定（学力向上実感プロジェクトに連動する）合格のための講座が設定された。例えば「漢字検定コース」とか「英語検定コース」などである。2、3年生の講座は検定コースに加えて様々な教科にわたっている。「初歩からのリスニング」「漢字・文法」「数学応用」などである。受講者数についてはその都度変わるので特に集計はしていない。受講者数を増加させようとしたり、積極的に勧誘したりすることは趣旨に反するので、あくまでも子供の主体性に委せた。

学力向上の時間の取り組み成果

教えて欲しい子供に教えたい教師が指導することから、充実した時間が持て、子供は学習の楽しさや良さが実感でき、一層意欲的になってきている。また指導を終えて職員室に帰ってきた教師が思わず「気持ちよく指導できた。」「すごく充実した時間だった」と、いい表情で語るなど、教師にとっても充実感が感じられる時間となっており、それが指導の熱意につながっている。学力向上の時間をきっかけにしてそれ以外の時間にも職員室や学年室に「教えてください」と言ってくる子供が増えており、学校全体に向学の気風が芽生えてきた。3学期の終業式では、学年代表の子供が3学期を振り返っての感想発表の中で「学力向上の時間で一杯質問が出来てよかった」と発表するなど、子供の中にもこの時間が定着しつつある。さらにこの時間は、放課後のことでもあり教師の取得免許の枠に縛られずに指導を行っているため、多くの教師が例えば数学の基礎学力の不足について共通認識できる上、子供の側にも他教科の先生が数学を教えてくれることから先生に対する信頼が高まってきている。指導をめぐって教師同士で質問し合うなど、教師間の関係も一層開かれてきている。

② 学力向上実感プロジェクトの取り組み

自分にどんな力が付いたのか実感できないと、次第に子供が学習から意欲を失う場合が多いように思われる。どうしたら実感させることができるか考えた結果が、各種検定の実施である。各教科会に呼びかけ、実施可能な検定をピックアップしてもらい、教科会が中心となって実施した。今年度実施した検定は、「英語」「数学」「漢字」「文章」「理科」「歴史能力」「パソコン」の7つである。検定のよさは一人ひとりの能力に応じたチャレンジができること、学年に関係なくチャレンジできること、社会的に認められた認定資格を手にすることができることなどである。これは、どんな励ましの言葉より実感を伴う。検定によっては受検したグレードに合格できなくても、その下のグレードにスライド合格するようなシステムのものもあり、受検した子供も適度な抵抗感や成就感をもってチャレンジした。検定に合格することが学力の向上につながるのかという論議はあると思うが、まずは一人ひとりの子どもが力が付いたと実感を得ることを大事に考えて取り組んだ。検定の実施日は休日であ

り、職員はボランティアで対応した。

学力向上実感プロジェクトの成果

平成13年度の全校生徒数は500名だったが、何らかの検定を受検した子供の延べ人数は468名に昇り、うち353名が何らかのグレードを取得するなど、当初予想していた以上の関心度で、意欲的であることに驚かされた。1年生の病弱な女子が漢字検定準2級に合格したり、2年生の男子が同じく漢字検定の3級に県1位で合格したりするなど、こういう取り組みをしたことで様々な子供に光が当たり校外で注目を浴びる結果となった。また新聞委員会が検定について取り上げたり、教科会が合格者を掲示したりしたことで、子供同士が互いにたたえ合ったり認め合ったりする姿が見られるなど、向学の気風が醸成されてきた。生徒指導に直接関わることは難しい女子職員らが、休日を返上して漢字検定、文章検定、英語検定を実施した。受験者が増加するなど意欲的な子供の姿に接し、自分が今この学校で機能していることに喜びを感じている様子がうかがえた。

5. 取り組みのまとめ

1つのプロジェクトなり施策なりを実施しようとするとき、最も大切なのはそのプロジェクトなりが今の自校にとって確実に必要なものであるという共通認識が全職員間にあることである。誰かが提案したときにそのとおりだと共鳴し、職員に意欲が湧いてくるようなビジョンでなければならない。さらに、全職員が関われることも重要なポイントである。先に述べたように、どちらかという生徒指導などは難しいと尻込みするような教師に対して、たむろしている子供がいたら声を懸けようなどといっても実際は機能しない。その人その人が出来ることは何かを考え、無理なく機能することが重要である。国語科、英語科の女教師が検定の受験者を増やし、休日返上で検定試験を実施したことは、学校の本流を太くするという意味で立派な生徒指導である。生徒指導の課題を生徒指導の切り口からだけ解決しようとしなくて、学校全体をデザインするという意識で施策を打っていくことが楽しくもあり、また成果があがるように思うのである。

こういった視点で取り組もうとすればできることはいくらでもありそうに思える。「明日も早く行きたい学校づくり」構想にもあるよう、修学旅行や文化祭などを見直したり図書館のAV化など、子供の姿をしっかりと見極め、思い切って変えていく姿勢が大事であると考ええる。仮説をもってチャレンジする柔軟なフットワークが今学校に求められている。

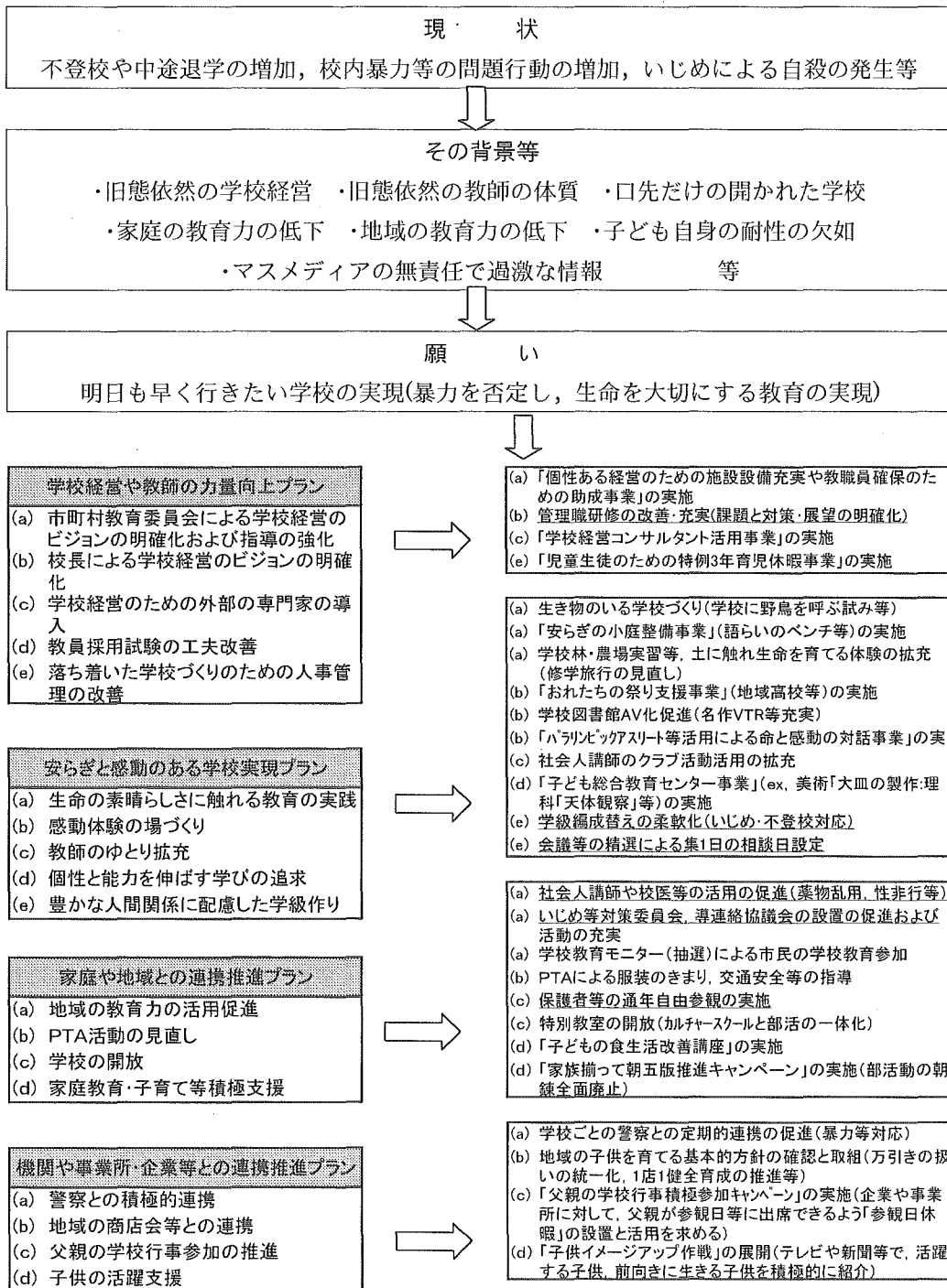
N校職員に「学校の特色は」と問えばおそらく「心を育てる会」と「学力向上プロジェクト」と答える職因果多いだろう。学校を上げて取り組んでいることが、一人ひとりの職員の誇りとなっていけば学校は変わっていくように思われる。

今後は、例えば参観日に父親が参加できるよう「参観日休暇制度」の制定を企業に呼びかけたり、インターネットで相談ができるようなネットワークを構築するなどさらに広域に構想を展開していきたいと考える。そういった取り組みによって、学校の境界線はファジーになり、地域全体が学校になっていくことが構想される。地域の子供は地域で育てるということはそういう素地が出来て初めて可能であると思うのである。

明日も早く行きたい学校づくり構想(案)

(暴力を否定し、生命を大切にする教育の実現に向けて)

生徒指導係



*下線表示のプランは10年度中からスタート可能。

N中学校心を育てる会
—地域や家庭とともに行う積極的生徒指導—

*** 学校環境を整える活動例**

- ・ 芸術家ボランティアによる絵画や書道などの芸術作品の展示
- ・ 専門家ボランティアによる植樹や造園の手入れ
- ・ 子どもと一緒に清掃ボランティア
- ・ 校内に花を飾るボランティア 等

*** 生徒に感動を与える活動例**

- ・ 芸術家ボランティアによる演奏等の発表
- ・ 感動に心震える映画鑑賞会
- ・ 同窓生の講話
- ・ 生命の大切さを体感する介護体験や地域の独居老人との交流体験
- ・ 父親ボランティアによる無人島体験, 100kmウォーク 等

*** 生徒の学力を高める活動例**

- ・ 自宅開放無料塾の開設 (書道, 会, 数学, 英語, 英会話, パソコン等)
- ・ 教員退職者等によるボランティアチームティーチング
- ・ 学校の教室を利用した夏 (冬) 休み各種教室の開設 等

*** 生徒を地域で育てる活動例**

- ・ 万引きをさせない商店連合会 (万引きは必ず警察へ届ける)
- ・ 1店舗 (1企業・事業所) 1健全育成運動
(レンタルビデオ屋—中学生に見せたい子の夏の感動作品の紹介と特別価格の設定)
- ・ セタや祇園などの実行委員会による夜間の子どもの安全管理
(教師に任せる発想を転換する)
- ・ 街角あいさつ運動 (登下校時, 積極的に子どもに声をかける活動)
地域企業による「父親が授業参観に行くための休暇制度」の導入 等

(2002年3月31日 受付)